

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

負債の動態に関する比較民族誌的研究

2021 年度第 4 回研究会(通算第 7 回目)

日時:2022 年 3 月 28 日 10:30~17:00

場所:AA 研マルチメディアセミナー室(306), オンライン会議室

使用言語:日本語

共催:AA 研共同利用・共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究」,科研費(基盤 B)

「負債の動態をめぐる比較民族誌的研究:アジア・アフリカ・オセアニア農村社会を中心に」(研究

代表者:佐久間寛(明治大学) 課題番号:19H01388)

10:30-12:00 吉田ゆか子 (AA 研所員)

「芸能の伝承におけるカネと『負債』」ーバリ島の仮面劇を例に」

13:00-14:30 林愛美 (明治大学博士研究員)

「不平等世界の人類学とは何かーK.ハートによる『負債論』の批判的読解」

14:45-16:00 山本真鳥 (法政大学)

「コミュニズムと一般的互酬性ーサモアの事例から」

16:15-17:00 全員

総合討論&打ち合わせ

概要

2021 年度第 4 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと実施した。感染症の状況に鑑み Zoom と対面を併用するハイブリッド方式を採用した。19 名が参加した。本研究会ではまず吉田から、インドネシア・バリの仮面劇を事例に、儀礼の場におけるカネのやり取りおよび神格や仮面という非人間にまつわる負債についての考察がなされた。また林の報告では、文化人類学者 K・ハートによる D・グレーバーの『負債論』の書評を基に「不平等世界の人類学」について議論が行われた。最後に山本報告では、サモア社会における一般的互酬性の検討を通じて、同概念をもとに狩猟採集民のコミュニズム(シェアリング)に似た対等なものやり取りから権力の発現に至るやり取りまでを地続きで説明できる可能性が示された。司会は佐久間が務めた。各報告の概要は下記の通りである。

(林)

「芸能の伝承におけるカネと『負債』—バリ島の仮面劇を例に」

吉田ゆか子(AA 研所員)

いわゆる伝統芸能に関しては、上演や稽古に対する報酬をカネで支払う／支払われることに難しさや、ある種のためらいが存在する場合がある。例えば、バリ島においては、芸能は祈りや捧げものでもあるため、それを売買することの是非が議論されてきた。本発表では、バリ・ヒンドゥの儀礼の中で上演が必須とされる仮面劇トペン・ワリを事例に、奉納芸におけるカネのやり取りや、その回避の実践について考察した。前半は、上演依頼主(儀礼主催者)と演者のやり取りを分析した。特に上演後の謝礼の受け渡しの場面では、神格や仮面といった人間以外の存在もが介在する、微細かつ多くの作法があること、またそれらによってカネで清算しきってしまうことや価値の数量化を逃れていることを指摘した。後半は、師匠と弟子の稽古において謝金のやり取りがないことに着目した。多くの場合稽古は無償で行われる。発表では、清算しきれない負債が両者の関係を持続させる事のみならず、弟子にとっては師に「負うこと」の楽しさや喜びがある事等を指摘した。

(吉田)

「不平等世界の人類学とは何か—K.ハートによる『負債論』の批判的読解」

林愛美(明治大学)

本発表では、人類学者 K・ハートによる D・グレーバー著『負債論—貨幣と暴力の 5000 年』の書評をもとに「不平等世界の人類学 (anthropology of unequal society)」について検討した。ハートは、『負債論』を過去の啓蒙思想や人類学的研究と比較検討し、グレーバーの思想は、彼のアナキスト的政治活動、人類学、そして「推測の歴史学 (conjectural history)」との融合として特徴づけられると述べている。ハートはまた、『負債論』は膨大な分量の書籍であるが、散文体で書かれているために、一般の読者にも受け入れられやすい点を評価している。ハートとグレーバーは共に「不平等世界」を変革するために「人間経済 (human economy)」の思想を打ち出してきたという。ハートは、「人間経済」思想においては、資本主義を唯一の価値とせず、全ての社会は複数の経済形態を組み合わせていることを前提とする点を強調する。そして、「人間経済」による「不平等世界」の変革可能性について希望をもってまとめている。

(林)

「コミュニズムと一般的互酬性—サモアの事例から」

山本真鳥（法政大学）

グレーバー『負債論』で重要な概念のひとつである「基盤的コミュニズム」について彼は、「互酬性ではない」と言い切りつつも「あるいはせいぜい、最も広い意味での互酬性を扱っているだけ」（和訳、p.150-51）と譲歩し、原注 21 でサーリンズの提唱する「一般的互酬性」に言及している。山本の発表は、サモア社会の「均衡的互酬性」を遂行するために行われる一般的互酬性のやり取りを検討し、「持っている人が持っていない人に分ける」一般的互酬性の原理で、狩猟採集民のコミュニズム（シェアリング）に似た対等なものやり取りから権力の発現に至るやり取りまでを地続きで説明できることを示した。一般的互酬性ではあからさまに返礼を贈ってその都度負債を帳消しにするということはしないが、一方的にもらうばかりであるとそこに負債の感覚が重くのしかかってきて、サモアの人々は自分に過分にあるものを探して贈るに至るのである。

（山本）